

前浜の水温観測を

増 殖 部

陸上で生活する生物は、私たち人間だけでなく、動物も植物もそれぞれの場所の気候に大きく支配されています。北国には寒冷な気候に対処した生活方法があり、農作物の豊作凶作もそれぞれに適した気象によつて決まります。陸上の気象には比較的敏感な私たちで、毎日テレビで今朝は何度あつたと放送されるのを聞いては日常の話題としているのに、海の中のことになるとさつぱり注意していないのが普通のようなのです。コンブの生長や実入り、貝の放卵、魚の移動など、私たちが空気の温度、すなわち気温に左右されるのと同じように、水温のわづかの変化によつても大きく変わります。

現在、水試では主として沖合資源のサケ、マス、サンマなどを対象にした漁海況予報事業を行ない、水温のうつり変りを発表して漁業の上に大いに役立たせておりますが、浅海

漁業に従事する皆さんを対象とした水温観測は、行なわれていません。最近、ノリ、ワカメの養殖事業が根室、厚岸、浜中などで盛んになり、これにともなつて水温や比重の観測が続けられています。これらの資料を比較してみますと、それぞれの場所の値には特徴があつて、道東の沿岸水温を一カ所の観測で間に合わせるには大変な無理があります。またノリ、ワカメの生長もその年の水温のうつり変りと比較すると、なる程と思われる事柄がいくつか目につきます。コンブも魚もこのような各自の前浜の水温の移り変りと対比してみることができれば、長い間にはきつと豊凶に関する何かの手がかりをつかむことが可能になると思います。

海況観測はもちろん海水の温度だけでなく比重、潮の流れ、汚れ具合などいろいろありますが、これらを一歩に行なうことは、今は

無理でも、最も生物に関係の深い水温観測だけでも、それぞれの前浜で行ないたいものです。一日、一年の資料だけではあまり役に立たなくとも、三年、五年、十年と続けば、私たちの漁業の止むべきと役立つ日がくるものです。

水温の観測は簡単なようで、難しいものです。難しさの第一は毎日休まずに同じ時刻に行なう努力が必要なこと、第二は正しい方法で行なわなければ間違つた水温を記録することになり、せつかくの努力も有効に活用できないことです。次に水温観測法の上で、特に皆さんが間違いやすいいくつかの点をあげてみます。これらの点によく注意し、またさらに正しい指導を受けて、一カ所でも多く実行していただきたいと思ひます。

(1) 観測場所は必ず一定させること。なるべく港外で水の入れ変りの良い所をえらぶ。
(2) 日曜祭日も休まない心掛けが必要。時刻は午前十時が基準。

(3) 水温計はマイナス五度―三五度（または五〇度）ぐらいの目盛幅が良い（水試であつせんします）。必ず予備をそろえ、できるだけ同じものを続けて使用する。できるな

らば一本ずつの誤差を水試でしらべてもらつておく。

(4) 水温計は海中に直接入れても良いが、バケツで水を汲み上げる。この時、バケツを一分ぐらい水中につけておくか、二、三度水を捨て、その後には汲み上げた水で測る。

(5) 水温計は球状部だけでなくアルコール（水銀）が昇つた所まで完全に水中に浸す。

(6) 目盛を読み取る時は水温計を視線と直角になるように手でおさえる。斜め上（下）から読まないこと。

水に入れてから読むまでの時間は四〇秒から一分ぐらいの間をおくこと。

(7) 必ず小数点以下一位まで読み取ること。一

五度、八度と言ひ大き過ぎる記録を避ける。一五・三度、八・八度と言ひ過ぎる記録を避ける。最小目盛の十分の一まで読み取るようになります。

(8) 汲み上げた水はできるだけ長く放置しないで手早く観測を行なう。夏の直射日光、冬の寒い風でも水温は影響を受けます。

なお、手近な手引きとして北海道浅海増殖研究会（道水産課内）編、「養殖事業実施に際しての調査・観測の手引き」があります。また水試職員が出かけた時に実際に指導を受けていたいただきたいと思ひます。